

# 群馬県内出土の板状土製品と他土製品

## — 縄文時代中期から後期前葉の土製品類 —

谷 藤 保 彦

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- |                        |                        |
|------------------------|------------------------|
| 1. はじめに                | 4. 群馬県出土の土製貝輪形腕輪(追加資料) |
| 2. 群馬県出土の板状土製品         | 5. おわりに                |
| 3. 群馬県出土の三角墳形土製品(追加資料) |                        |

### — 要 旨 —

縄文時代を代表する装身具として、先ず石製・土製の耳飾りがある。その研究は多くの先学によって研究対象とされ、今日にあっても進展の一途をたどっている。その一方で、耳飾り以外の装身具研究も盛んに進められている。各所におけるシンポジウムの開催や、紀要・雑誌等に掲載される論考、さらに刊行された『身を飾る縄文人一副葬品から見た縄文社会ー』(2019雄山閣)も、こうした研究の一端を著わしている。

群馬県内出土の石製品や土製品については、筆者も以前より集成を進めてきた。「関東内陸部における縄文時代中期末・後期初頭の「土製貝輪形腕輪」」(谷藤2011)では貝輪を模した土製腕輪を内陸部特有の腕輪とし、「群馬県出土の三角墳形土製・石製品」(谷藤2017)では中期後葉の加曾利E3式期から称名寺式期にかけて多く出土していることを明らかとし、併せて三角墳形土製品とは形状を異にした穿孔をもつ土製品の存在を指摘した。また、「群馬県内出土の縄文時代土製耳飾りー中期から後期前半ー」(谷藤2021)では、形態分類と施文文様から時期的な傾向と特徴を明らかにしてきた。本稿では、三角墳形土製品とは形状が異なり、且つ穿孔をもつ土製品を「板状土製品」として着目し、未だ報告書掲載数は少ないがその事例を集成する。併せて、三角墳形土製品および土製貝輪形腕輪についても、最近の報告事例を追加する。

### キーワード

対象時代 縄文時代  
対象地域 群馬県  
研究対象 土製品

## 1. はじめに

縄文時代を代表する装身具として、先ず石製・土製の耳飾りが挙げられ、その研究は多くの先学によって対象とされ、また今日的にも進展が図られてきた。そうした中にあって、耳飾り以外の装身具も多く知られるところであり、近年では日本玉文化研究会ならびに日本玉文化学会による「玉」研究が研究集会をも含めて盛んに進められている。また、敬和学園大学人文社会科学研究所による「研究会議 環日本海の玉文化の始源と展開」(2003)、明治大学を会場とした科学研究費助成事業基盤研究C「威信材から見た縄文社会の構成と交易—縄文時代のヒスイ大珠を巡る研究—」(2012)、早稲田大学先史考古学研究所による「公開シンポジウム 縄文時代装身具の考古学—身体の装飾をどうとらえるか—」(2013)が開催されるなど、装身具に魅せられた研究は止まるところを知らない。雄山閣から出版された『身を飾る縄文人—副葬品から見た縄文社会—』(2019)も、こうした研究の一端を著わしている。

筆者も、これまで群馬県を中心とした装身具類の集成に取り組んできた。土製品を扱ったものでは、海浜部での貝輪を模した内陸部特有の土製腕輪を取り上げた「関東内陸部における縄文時代中期末・後期初頭の「土製貝輪形腕輪」」(谷藤2011)。「群馬県出土の三角壇形土製・石製品」(谷藤2017)では、中期後葉の加曾利E3式期から称名寺式期にかけて多く出土していることを明らかとし、併せて三角壇形土製品とは形状を異にした穿孔をもつ土製品の存在を指摘した。昨年の「群馬県内出土の縄文時代土製耳飾り—中期から後期前半—」(谷藤2021)では、形態分類と施文文様から時期的な傾向と特徴を明らかにしてきた。これらは、筆者が縄文時代の土器を扱う中で、広域な交差編年、地域間交渉、そして地域性を考えるにあたり、土器以外でも同様な現象を見出すことができれば、より補完することができると考えたからである。

本稿では、以前に指摘した三角壇形土製品とは形状が異なり、且つ穿孔をもつ土製品を「板状土製品」として着目し、未だ報告書掲載数は少ないがその事例を集成する。併せて、三角壇形土製品および土製貝輪形腕輪についても、最近の報告事例を追加する。

## 2. 群馬県出土の板状土製品

「板状土製品」は、筆者が以前に指摘したように、三角壇形土製品とは形状を異にした土製品で、その時期は三角壇形土製品より遅れた後期初頭から後期前葉期の遺物であることが予測されていた。集成数は少ないが、出土例と遺構および共伴土器から、その時期を確認し、板状土製品の性格にも触れてみたい。

### (1) 主な出土例

現段階(2021年10月)で集成できた板状土製品は、5遺跡5点であった。他にも集成しきれていない資料はあると思われるが、後日、集成に加えたい。以下、板状土製品の出土事例を記す(第1図)。

### 富岡清水遺跡

富岡市富岡に所在する。道路建設に伴い、2007・2010年に発掘調査された。縄文時代の遺構には、後期初頭の竪穴建物(敷石住居含む)が計4軒検出され、出土遺物も多い。

板状土製品は、C区15号土坑(『富岡清水遺跡 富岡城跡』2012)から第1図に示したように土器と共に1点が出土している。土器は口縁部を欠く頸部以下の個体で、頸部に貼付文から伸びる逆J字状隆帯やO字状隆帯を連結させ、隆帯に沿わせながら沈線による懸垂文を施す。单位文間には、逆V字状に3条沈線を施し、中央に逆J字文を配する文様構成をとる。1の板状土製品は、楕円形を呈し、長さ6.6cm、幅4.4cm、厚さ1.5cm、重さ47.1gを測る。表面の中央と縦・横位の端に刺突をもつボタン状貼付が配され、貼付をつなぐ太い沈線、さらに二重の弧線を描く。裏面は無文。長軸方向の中央には、径5mmほどの孔が貫通する。供伴する土器から、後期初頭の称名寺式期の所産と考えられる。

### 三ツ子沢中遺跡

高崎市三ツ子沢町に所在する。北陸新幹線建設に伴い、1994～1995年に発掘調査された。縄文時代の遺構には、前期から後期前半までの竪穴建物(敷石住居含む)が計20軒検出され、出土遺物も多い。

2の板状土製品は遺構外出土(『三ツ子沢中遺跡』2000)で、観察には焼成は良好で、色調は鈍い黄橙、胎土に細砂粒を含み、長さ6.8cm、幅3.7cm、中心に径3mmの孔が貫通し、表面には沈線で文様を描出と記載されている。また、報告では後期前半の土笛としている。遺構や出土土器から、恐らく後期の称名寺式ないし堀之内1式期に伴うと考えられる。

### 芳賀東部団地遺跡

芳賀団地遺跡群は、前橋市嶺町、勝沢町、小坂子町、鳥取町、小神明町、五代町に跨って所在し、北部団地遺跡、西部団地遺跡、東部団地遺跡の3遺跡からなる。この内、縄文時代の遺構が検出されたのは芳賀東部団地遺跡であり、1976～1980年にかけて発掘調査された。

板状土製品は、J10号住居(『芳賀東部団地遺跡III』1990)から土器と共に1点が出土している。土器は小突起をもつ平口縁となる深鉢形土器で、小突起部に円形刺突とC字状の弧線が描かれ、無文帯の口縁部が屈曲気味

に直立し、胴部にはJ字状の文様が描出され文様内に縄文を充填する。図示したもう一点の土器は把手をもつ波状口縁を呈する深鉢の口縁部で、胴部に沈線でJ字状等の文様が描出される。他にも同時期の口縁部や胴部片が掲載されている。

3は、報告で土版あるいは土錐とされたもので、楕円形を呈する板状土製品である。長さ5.8cm、幅4.7cm、厚さ2.3cm、を測り、表面から側面を経て裏面へと続く曲線的な文様が描かれ、器体中央に上端から孔が貫通している。J10号住居の出土土器から、後期初頭の称名寺式期の所産と考えられる。

### 天ヶ堤遺跡

伊勢崎市三和町に所在する。北関東自動車道建設に伴い、1994～1996年に発掘調査された。縄文時代の遺構には、中期から後期前葉の竪穴建物(柄鏡形敷石住居含む)が82軒、土坑836基が検出され、遺物も多量に出土している。また、隣接する三和工業団地Ⅱ遺跡と共に、中期後半から後期初頭の集落を形成していたと考えられている。

板状土製品は、IV・4区8号配石(『天ヶ堤遺跡(2)』2008)から多くの土器と共に1点出土している。図示した土器は平口縁となる深鉢形土器で、口縁部無文帶下に低い隆帯を1条巡らせて区画し、以下の胴部には縦位のS字状渦巻文を描き、文様内を磨り消す。文様間には縄文が充填される。

4は報告で土版とされた、楕円形を呈する板状土製品で、側面の一部を欠損する。長さ11.3cm、幅(7.8)cm、厚さ4.0cm、を測り、表面から側面を経て裏面へと続く片面半円状の弧線が描かれ、器体中央には上端から孔が貫通している。供伴する出土土器から、後期初頭の称名寺式期の所産と考えられる。

### 伊勢崎市三和工業団地Ⅱ遺跡

伊勢崎市三和町に所在する。工業団地造成に伴い、2000～2003年に発掘調査された。縄文時代の遺構には、中期後半から後期初頭を主とした竪穴建物(柄鏡形敷石住居含む)が計152軒、土坑1498基が検出され、出土遺物もかなりの量となっている。

板状土製品は遺構外出土の1点で、観察には色調は鈍い黄橙、胎土に砂粒を含み、長さ7.0cm、幅3.9cm、厚さ1.6cm。上端から下端まで孔が貫通し、沈線による中央に渦巻文をもつ十字文様を描き、文様外に円形刺突を施す。表裏同文様との記述があり、堀之内式の所産としている。

図示した5には、楕円形を呈する器体の上端にはV字状の切込みが確認でき、図示にはないが器体中央に孔が貫通していることが窺える。また、表裏面は同一文様が

描かれ、中央の円文と十字状沈線で4分割の区画帯を設け、各区画内の弧線と弧線に沿う刺突が施されている。

遺構や出土土器から、恐らく後期の称名寺式ないし堀之内式期に伴うと考えられる。

### (2)板状土製品の出土時期およびその性格

前述したように、群馬県内での板状土製品の出土例は5遺跡からの5例と少ない。近隣地域での集成が必要なことは勿論であるが、ここでは、群馬県内の状況から板状土製品の時期やその性格に触れておきたい。

#### 〈板状土製品の時期〉

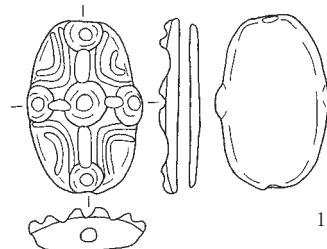
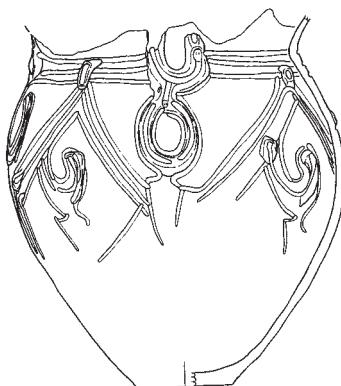
遺構からの出土例とすると、1の富岡清水遺跡C区15号土坑、3の賀東部団地遺跡J10号住居、4の天ヶ堤遺跡IV・4区8号配石の3例であるが、何れも後期初頭の称名寺式から堀之内式にかけての時期である。他の2例の遺構外出土例についても同様で、2の三ツ子沢中遺跡、5の三和工業団地Ⅱ遺跡ともに遺跡の状況から称名寺式から堀之内式にかけての時期とみられる。

以上、5例とも全て後期初頭から前葉期にかけての遺物であり、中期や後期中葉以降にわたる遺物ではないようである。結果、板状土製品は、後期初頭から前葉期の割と短い時期の遺物と考えられる。

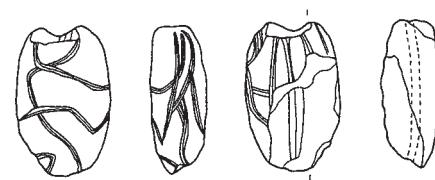
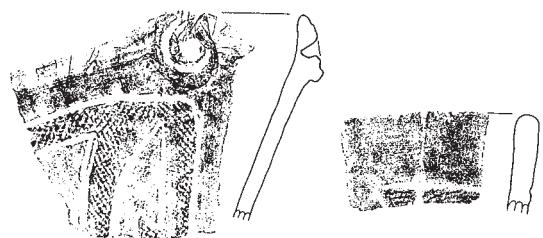
#### 〈板状土製品の性格〉

以前にも指摘したことがある(谷藤2017)。同地における三角壇形土製品および石製品は、中期後半の加曽利E3式期に盛行し、その後土製品は減少。さらに、石製品は後期初頭以降も残るが減少傾向となる状況が明らかとなる中、三角壇形土製品に代わる土製品の存在がないかという点である。三角壇形土製品の大きな特徴である三角柱の形状と、長軸方向の中央に孔を貫通させることは、板状土製品において三角柱から扁平な楕円形への形狀の違いはあれど、長軸方向中央の孔は共通する特徴であり、同質な性格の遺物と考えられる。つまり、時間経過による形狀の変化を考えることができよう。

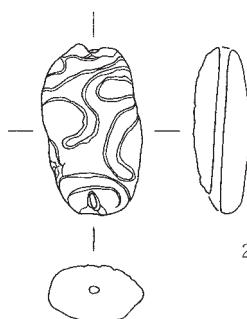
このことは、この地域が後期初頭に至っても前代の加曽利E式の系統をひく土器が根強く残ることでも知られ、貝輪形腕輪を土製に置き換えた「土製貝輪形腕輪」を作り出す地域でもあり(中期後半の加曽利E3式期には、ヒスイ製大珠を真似た「大珠形土製品」もある)、同質な性格であるならば材質の変更は許容されていたことが理解できる。同様に、最大の特徴である中央孔さえ有していれば、形狀の変更も許容されたと考えることはできないだろうか。それが、三角壇形土製品→板状土製品という変化と理解したい。



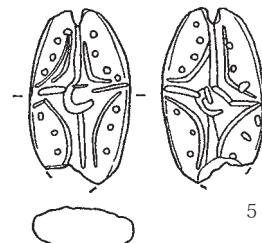
富岡清水遺跡 C区15号土坑



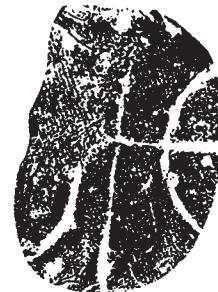
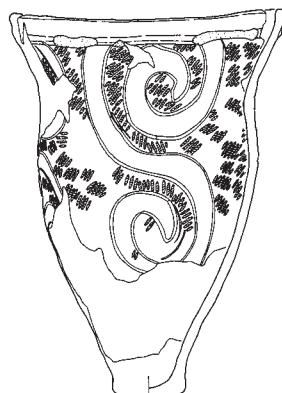
芳賀東部団地遺跡 J 10号住居



三ツ子沢中遺跡 遺構外



三和工業団地II遺跡 遺構外



4

天ヶ堤遺跡 IV・4区8号配石

第1図 群馬県内出土の板状土製品

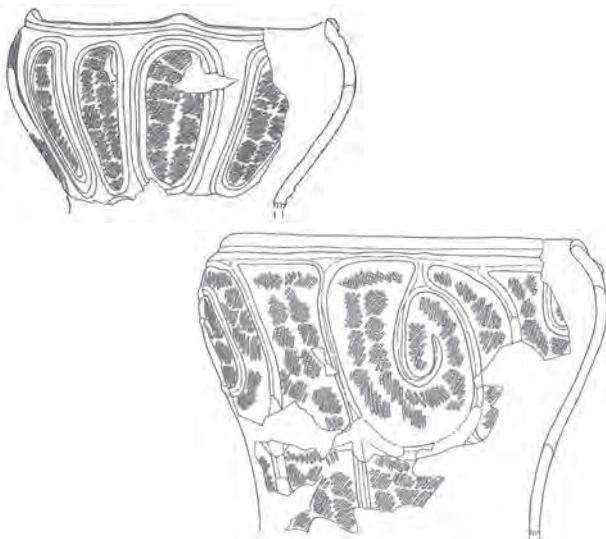
土製品S=1/3、土器の縮尺は任意

### 3. 群馬県出土の三角墳形土製品(追加資料)

以前に筆者が集成した群馬県出土の三角墳形土製品(谷藤2017)の追加資料で、新たに4遺跡計6点を加えることができた。(第2図)。

#### 伊勢崎市下田遺跡

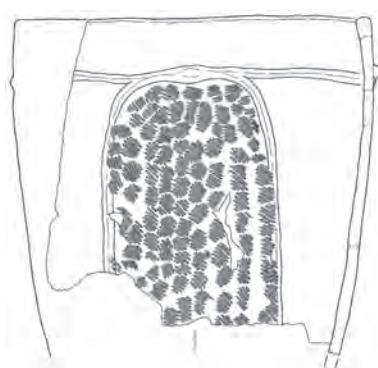
伊勢崎市田部井町に所在する遺跡で、5区1号住居から2点出土している。1は一部欠損するが、長さ9.1cm、高さ5.4cm、幅6.0cmを測り、長軸中央に孔が貫通する。正面は上部両端が丸みをもつ長方形を呈し、文様に縄文と渦巻状の沈線を施す。側面は三角形で、各面が平坦な三角柱状をなす。2は無文の完形品で、長さ10.1cm、高さ6.6cm、幅7.1cmを測り、長軸となる両側面間に孔が貫通する。器体中央部の断面形は三角形を呈するが、両端の側面が小さな三角形となることから、正面・背面・底面の形状は角が丸まった弧状ないし俵状を呈し、特に上部の稜がより弧状となる。時期は、住居出土土器から加曾利E3式期である。



5区1号住居出土土器

#### 伊勢崎市天ヶ堤遺跡

伊勢崎市三和町に所在する遺跡で、側道3区1号住居から1点出土している。3は長さ5.3cm、高さ4.7cm、幅6.8cmを測り、長軸中央に孔が貫通する。正面・背面・底面概ね正方形に近く、側面は三角形で各面が概ね平坦な三角柱状をなし、赤色塗彩が施される。時期は、住



側道3区1号住居出土土器

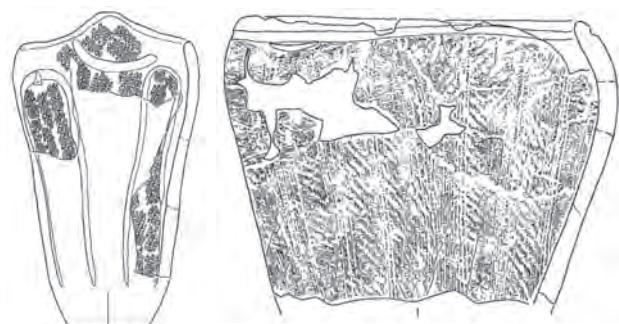
居出土土器から称名寺式期である。

#### 渋川市金井東裏遺跡

渋川市金井町に所在する遺跡で、遺構外ではあるが1点出土している。4は左側および下半を大きく欠損するが、残存部分で長さ(7.0)cm、高さ(3.0)cm、幅(4.3)cmを測り、長軸中央の孔は不明。正面と背面には周縁に刺突を巡らせ、その内側中央に沈線による渦巻文および蕨手状の文様を施している。報文では、時期を後期前半としている。

#### 長野原町林中原Ⅱ遺跡

長野原町林に所在する遺跡で、61区39号住居から1点出土している。5は長さ8.4cm、高さ5.2cm、幅5.2cmを測り、長軸中央に孔が貫通する。正面は概ね長方形を呈し、文様に2条の沈線で渦巻文を施す。背面と底面および三角形となる両側面には、外縁に沈線を巡らせており、各面が平坦な三角柱状を呈している。時期は、住居出土土器から加曾利E3式期である。

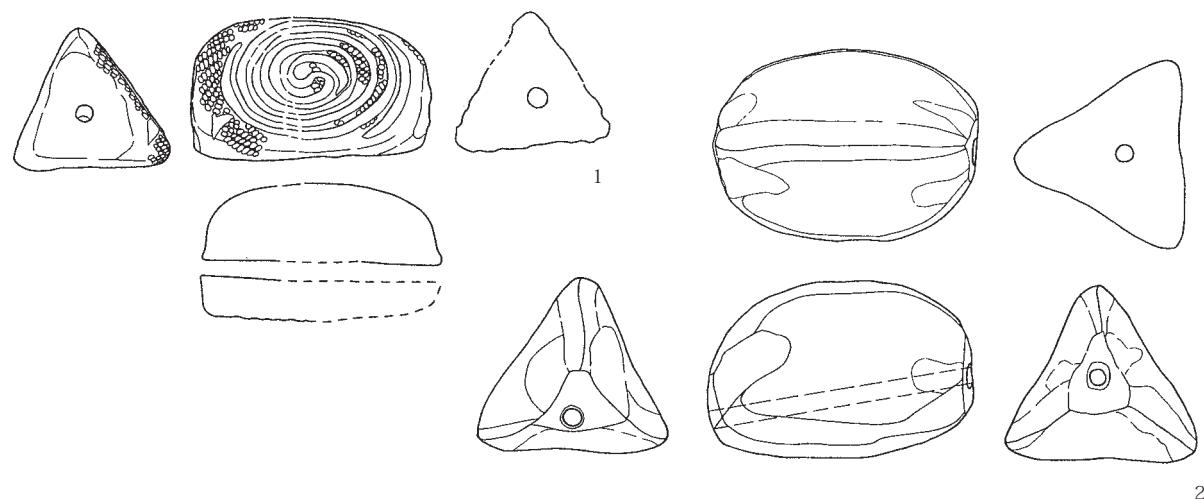


61区39号住居出土土器

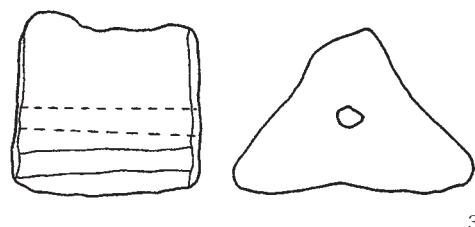
#### 長野原町石川原遺跡

長野原町川原湯に所在する遺跡で、5区遺構外から1点出土している。6は上部を一部欠くが、長さ8.5cm、高さ5.5cm、幅5.0cmを測り、長軸中央に孔が貫通する。概ね長方形を呈する正面と背面の外縁に2条の沈線を巡らせ、その内側に2条の沈線で渦巻文を施す。三角形となる両側面には、上部を頂点とした外縁の二縁に沈線を施している。また、底面も含めた器面全体には丁寧な研磨が施されている<sup>(1)</sup>。なお、示した図は底面をあえて割愛した。遺構外出土ということで時期は特定できないが、報文では後期初頭としている。しかし、同様な文様が施される例からすると、中期後葉の加曾利E3式期頃の可能性が高い。

以上、群馬県出土三角墳形土製品の追加資料5点をみてきたが、時期を特定できた最も新しい資料に後期初頭の称名寺式期が1点、そして中期の加曾利E3式期が2ないし3点であった。前回の集成では13点を挙げていた

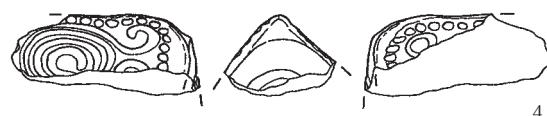


下田遺跡 5区1号住居



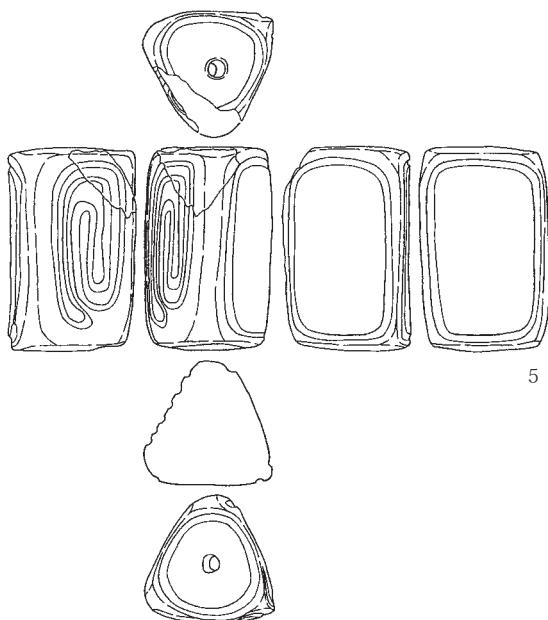
3

天ヶ堤遺跡 側道3区1号住居



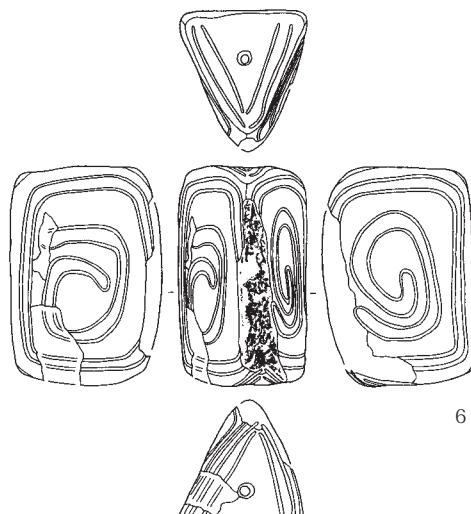
4

金井東裏遺跡 遺構外



5

林中原II遺跡 61区39号住居



6

石川原遺跡 遺構外

第2図 群馬県内出土の三角壇形土製品(追加資料)

土製品S=1/3、土器の縮尺は任意

が、この追加資料を合わせると計18点となる。また、この計18点の内、時期の特定できた資料の内訳は、加曽利E3式期の資料は4点から7点へと増加し、加曽利E4式期の2点、称名寺1式期(称名寺式中段階)が1点となった。前回も指摘したように、加曽利E3式期に盛行している状況がより明らかとなった。

#### 4. 群馬県出土の土製貝輪形腕輪(追加資料)

以前に集成した(谷藤2011)、群馬県出土の土製貝輪形腕輪の追加資料である。土製貝輪形腕輪とは、海浜部の貝輪形腕輪(貝輪)を模倣して土製で作ったもので、栃木県や群馬県といった関東内陸部の後期初頭期に多く出土する。また、長野県(東信)でも出土していることが知られている。

以下、追加となる6遺跡の各資料を示す(第3図)。

##### 渋川市金井下新田遺跡 2021『金井下新田遺跡』

1区遺構外からは、1~5の計5点出土している。何れも破片資料で、無文である<sup>(2)</sup>。時期の特定は難しいが、中期後葉の可能性もある。

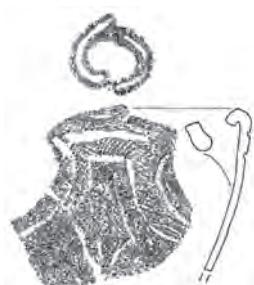
##### 東吾妻町上郷岡原遺跡

IV区436号土坑(『上郷岡原遺跡(3)』2009)からは、6の完形に近い1点が出土している。外径の長軸1.5cm、短軸8.3cm、高さ2.0~2.8cmを測り、内径は長軸7.0cm、短軸4.6cmを測る。外面には、縄文が施されている。土坑内から出土した土器は称名寺1式であることから、時期は称名寺式期である。

##### 長野原町東宮遺跡

計3点の出土が確認(『東宮遺跡(5)・三ッ堂岩陰』2021)できる。1点はV区8号竪穴建物から出土した7で、外面に縄文を施す破片資料である。共伴する土器から、時期は後期初頭の称名寺式期である。

また、V区84号竪穴建物からは8が、V区86号竪穴建物からは9が、それぞれ1点づつ出土している。共に外面に縄文を施すが、遺構出土土器が少なく時期は不明。

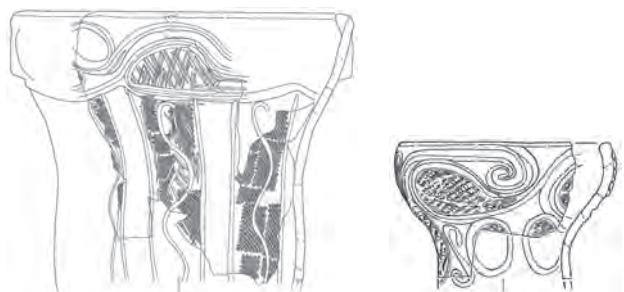


V区8号竪穴建物出土土器

##### 長野原町林中原Ⅱ遺跡

62区12号住居(『林中原Ⅱ遺跡(2)』2018)からは、10・11とした2点の破片資料が出土している。共に外面に縄文が施されている。住居内出土の土器は加曽利E3式期である。

式であることから、時期は加曽利E3式期か。



62区12号住居出土土器

##### 長野原町横壁中村遺跡

以前の集成後に報告された資料である。遺構外(『横壁中村遺跡(14)』2014)からは、12~17の計6点の破片資料が出土している。この内の12~15の4点の外面には縄文が施され、16・17の2点は無文である。時期は不明であるが、中期末葉から後期初頭期か。

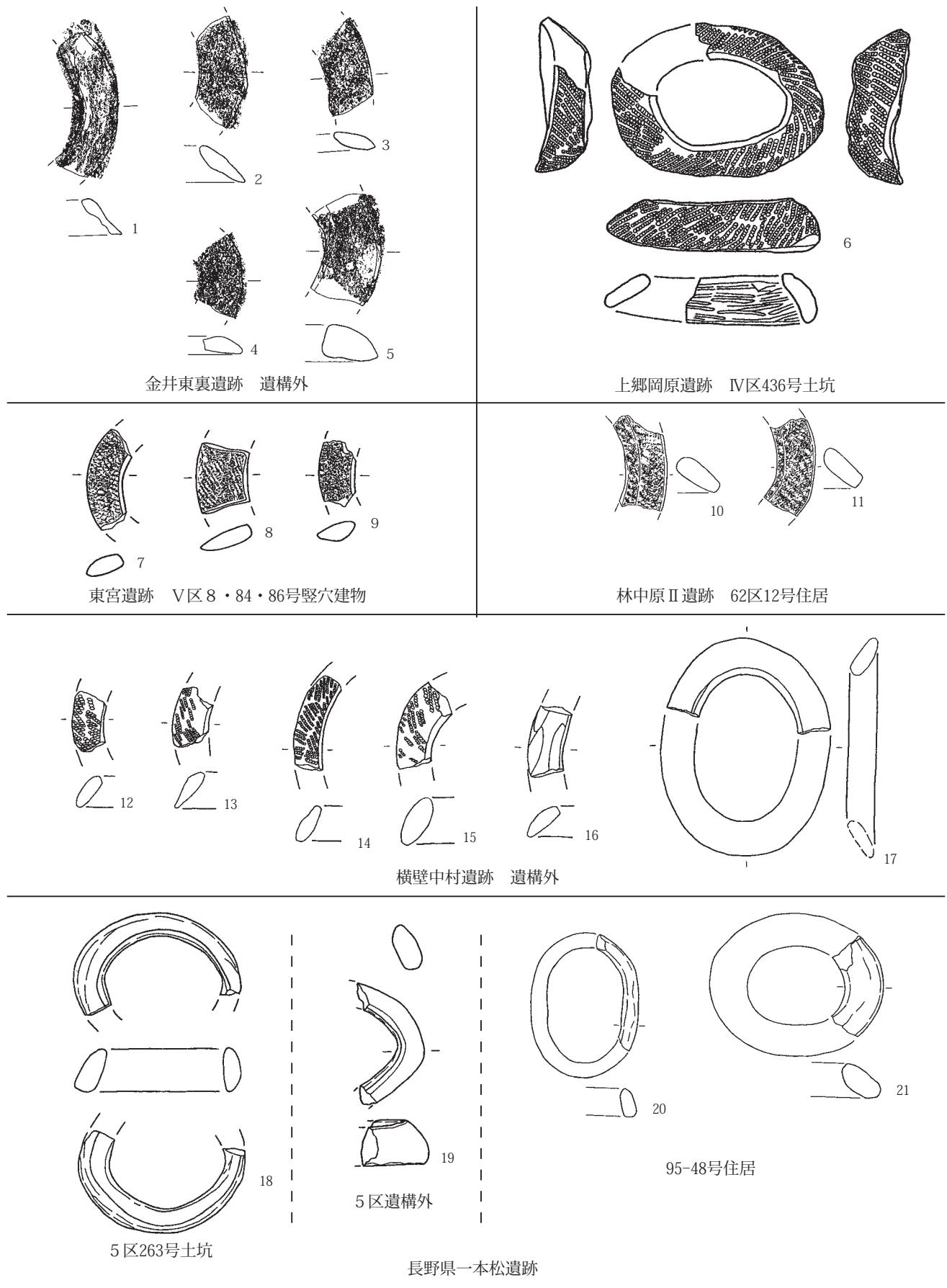
##### 長野原町長野原一本松遺跡

以前の集成漏れと、その後の報告資料である。18~21の計4点が出土している。5区263号土坑(『長野原一本松遺跡(1)』2002)からは、18とした無文の半完形品が1点出土している。共伴する土器がなく、時期は不明。また、5区遺構外(『長野原一本松遺跡(5)』2009)からは、19の無文の破片資料が1点出土している。時期は不明。さらに、95-48号住居(『長野原一本松遺跡(6)』2013)からは、21・22の無文の破片資料が2点出土している。共伴する土器から、時期は後期初頭称名寺1式期である。



95-48号住居出土土器

以上、群馬県内からの出土資料は、6遺跡計21点を追加することができた。前回の集成と合わせると、群馬県



内の例は14遺跡、計78点となる。時期の確定できない資料が多い中、最も古い資料として林中原II遺跡62区12号住居出土の加曾利E3式期があり、金井下新田遺跡の資料も中期後葉の可能性をもつ。このことは、土製貝輪形腕輪が関東内陸部の後期初頭期にみられる特徴的な装身具の一つであるが、その片鱗は中期後葉段階まで遡るということになる。ただし、林中原II遺跡等の例が混入遺物であれば、話は別である。今後、資料の増加を含めた検討が必要である

## 5. おわりに

以前の拙稿(谷藤2017)で指摘した三角墳形土製品とは形状が異なり、且つ穿孔をもつ土製品を「板状土製品」として扱い、出土例は少ないが群馬県内での事例を集成した。その形状および特徴は、扁平な楕円状の土版に沈線等で文様を描き、長軸方向に貫通する孔を有する。しかも、それらは後期初頭から前葉にかけての時期に限定されることも分かってきた。そうしたことからすると、三角墳形土製品の大きな特徴である三角柱の形状と、板状土製品の扁平な楕円形状とでは違いはあるが、長軸方向中央の孔は共通する特徴であり、性格的には同質な遺物と考えられる。そこで両者の出土時期を比較すると、群馬県内における三角墳形土製品および石製品は、中期後半の加曾利E3式期に盛行し、その後土製品は減少。さらに、石製品は後期初頭以降も残るが減少傾向となる。つまり、三角墳形土製品が減少した後に、板状土製品の出土例が多くなっていることが理解でき、時間経過による形状の変化(三角墳形土製品→板状土製品)を考えることができる。なお、上記したように、形状変化によることからすれば、この土製品の性格を土笛とすることは難しくなる。

一方、この板状土製品の出土分布については今後の課題となるが、群馬県以外でも出土しているようである<sup>(3)</sup>。

また、三角墳形土製品の報告事例6点を加えて計18点となり、中期後葉の加曾利E3式期に盛行している状況がより明らかとなった。そして、土製貝輪形腕輪の群馬県内の集成では、県内全域に計14遺跡78点となり、後期初頭期に盛行する特徴的な装身具の一つとして位置付けられる。

文末ではあるが、他県の状況をご教示いただいた鈴木和弘氏に記して感謝したい。また、こうした土製品については、今後も地道に集成を重ねたい。

## 註

- (1) 報告の本文中には、底面には網代痕が見られるとあることから(図の拓本からは網代痕と異なる圧痕と思われた)、その確認を行うこととした。実見した結果、網代痕はなく、研磨痕のみを確認した。
- (2) 報告では15を環状土製品であるが、形状は他と同様であり、厚手の土製貝輪形腕輪である。
- (3) 埼玉県寄居町所在の富田庚申塚遺跡第7次調査で、同様な貫通した孔を有する扁平な板状の土製品が、縄文時代後期前葉の土器と共に土壙から出土していることを調査者の鈴木和弘氏からご教示いただいた。併せて、他にも同様な資料の出土事例があることをご教示いただいた。

## 引用・参考文献

- 阿部芳郎 2007 「内陸地域における貝輪生産とその意味 一貝輪づくりと縄文後期の地域社会ー」『考古学集刊 第3号』pp.43-64
- 大塚昌彦 2001「群馬の三角墳形土製品」『群馬考古学手帳 11』pp.41-51
- 忍澤成視 2006 「関東地方における縄文中期の貝輪の実態」『千葉縄文研究 1』pp.57-76
- 栗島義明編 2019『身を飾る縄文人—副葬品から見た縄文社会ー』雄山閣
- 小島俊彰 1983「三角墳形土製品」『縄文文化の研究 9』pp.128-140
- 小林康男 1980「三角墳形土製品考」『長野県考古学会誌 37』pp. 1-18
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2021「富田庚申塚遺跡(第7次)」『さいたま埋蔵文化財調査事業団 2021年報告書』pp.57-76
- 田中浩江ほか 2016『滝ノ上遺跡IV』常陸大宮市教育委員会
- 谷藤保彦 2007「群馬県における中期終末・後期初頭の様相」『第20回縄文セミナー 中期終末から後期初頭の再検討』pp.59-119・『記録集』
- 谷藤保彦 2011「関東内陸部における縄文時代中期・後期初頭の「土製貝輪形腕輪」」『梅檀林の考古学 一大竹憲治先生還暦記念論文集』pp.43-56
- 谷藤保彦 2012「群馬県内におけるヒスイ製大珠と垂飾り ～ヒスイ製と他の材質による垂飾り～」『縄文時代のヒスイ大珠を巡る研究』科学研究費助成事業基盤研究C「威信材から見た縄文社会の構成と交易」pp. 3- 8
- 谷藤保彦 2017「群馬県出土の三角墳形土製・石製品」『二十一世紀考古学の現在 山本輝久先生古希記念論集』pp.317-327
- 藤森栄一・近藤勘次郎 1937「越後中期縄文文化馬高期に於ける土製装飾具の発生について」『考古学 8-10』pp.480-488
- 八幡一郎 1928「立体土製品」『考古学研究 2-3』pp.34-45

## 図出典報告書

### 板状土製品

前原 豊ほか 1990『芳賀東部団地遺跡Ⅲ』前橋市教育委員会  
池田政志 2000『三ツ子沢中遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
福島正史ほか 2004『三和工業団地Ⅱ遺跡』伊勢崎市教育委員会  
関根慎二ほか 2008『天ヶ堤遺跡(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
谷藤保彦ほか 2012『富岡清水遺跡 富岡城跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

### 三角墻形土製品

小林 徹ほか 2007『下元屋敷遺跡・下田遺跡(1)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
関根慎二 2008『天ヶ堤遺跡(2)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
石坂 茂ほか 2018『金井東裏遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
山口逸弘ほか 2018『林中原Ⅱ遺跡(2)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
鈴木佑太郎ほか 2021『石川原遺跡(3)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

### 土製貝輪形腕輪

諸田康成 2002『長野原一本松遺跡(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
小野和之 2009『長野原一本松遺跡(5)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
小野和之 2013『長野原一本松遺跡(6)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
田村公夫ほか 2009『上郷岡原遺跡(3)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
藤巻幸男ほか 2014『横壁中村遺跡(14)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
山口逸弘ほか 2018『林中原Ⅱ遺跡(2)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
小野和之ほか 2021『東宮遺跡(5)・三ツ堂岩陰』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
山口逸弘ほか 2021『金井下新田遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団